

民間非営利団体の催しにおける子どもの学び

－「奈良町井戸とかまどご飯体験」の実践を中心に－

岩本廣美

(奈良教育大学 社会科教育講座 (社会科教育))

二十軒起夫

(公益社団法人奈良まちづくりセンター)

Children's Learning in the Event Using Well and Kamado by Non-Profit Organization at Naramachi

Hiromi IWAMOTO

(Department of Social Studies, Nara University of Education)

Tachio NIJUKKEN

(Nara Machizukuri Center Incorporated Association)

要旨：本報告は、2016（平成28）年10月に、奈良町で民間非営利団体が主催した催しにおいて、井戸とかまどを活用しご飯を炊く活動等を子どもが体験するプログラムを企画し実践した目的、内容、経過、意義等を具体的に述べたものである。関連する諸活動の中で、子どもは、井戸水を汲み出す過程に関心を強く抱いたが、同伴の保護者は、かまどでご飯を炊く過程に強い関心を抱く傾向が見られた。しかし、2015（平成27）年12月にほぼ同内容で実施した催しの際の子どもの関心傾向は、10月に実施した際とやや異なった。ほぼ同内容の実践であっても、諸条件が異なると、子どもの受け止め方は異なったものになる可能性があることが示唆された。

キーワード：奈良町 *Naramachi*

井戸 *well*

かまど *kamado* (Japanese traditional range)

昔の暮らし *life in the past times*

原体験 *proto experience*

1. はじめに

子どもの人間形成に寄与する人々の営みを教育実践と呼べば、それには、学校における実践に加えて、家庭や地域における実践も含まれよう。筆者はこれらのうち地域における教育実践に関わって、子どもを主たる顧客とする駄菓子屋の店員が教育実践を行っているとの見解を実態調査にもとづいて述べたことがある（岩本・細谷2005）。しかし、駄菓子屋における教育実践は、顧客である子どもが来店して初めて実践の可能性が生まれることから、計画的に行われるものではなかった。それに対して、本報告では、地域における民間非営利団体が計画的に取り組んだ教育実践の一例を述べようとするものである。

事例として取り上げるのは、公益社団法人奈良まちづくりセンター¹（以下「センター」と表記する）が、2016（平成28）年10月15日（土）に奈良町²で開催した催し「奈良町井戸とかまどご飯体験」（以下「この催し」または「今回の催し」と表記する）における実践である。この催しは、二十軒理事長をはじめとするセンター関係

者の全面的協力を得ながら、岩本が中心になって計画・準備し、実践したものである。

以下では、この催しの目的・概要・実施経過等を述べるとともに、催しに参加した子どもがどのような活動を体験し、どのような感じ方をしたのか、また、それらの体験は子どもの学びとしてどのような意義を有するのかについて、それぞれ具体的に述べたい。

この催しに参加した子どもは、公募に応じた小学校1年生から中学校1年生までの計7名（男4、女3）で、いずれも保護者（父親3、母親4）が同伴している³。報告では、参加した子どもおよび保護者を対象に、この催し終了直後に実施したアンケート調査結果をもとに述べる箇所があるが、サンプル数が少ないこと等を考慮し、参考のために、2015（平成27）年12月23日（水、祭）および26日（土）に、ほぼ同内容で実施した催し後に得たアンケート調査結果（サンプル数23日19、26日22）も援用して述べる。

2. 実践の目的・内容

2. 1. 実践の目的

この催しを実践した目的は次の2点である。

- ア. 井戸水を汲んで利用することやかまどでご飯を炊く体験を通して、参加した子どもは、自然と結びついた生活の一端を感じ取ることができる。
- イ. 奈良町で公開している町家に関する展示施設や商店等を実地に観察することを通して、参加した子どもは、昔の生活の様子を具体的に理解することができる。

2. 2. 実践の概要

実践において、参加した子どもが取り組む主な活動は次の1)~5)の内容で構成した。指導実践は岩本が進め、センターの関係スタッフが補助した。下線で示した箇所は、活用した道具、材料・燃料、地域資源である

- 1) 釣瓶を使って井戸水を汲む。汲んだ水と洗った米を釜に入れ、ご飯を炊く準備をする。(米の浸漬)
- 2) ナタネ殻、スギの枯れ枝、薪等を燃料に用いてかまどでご飯を炊く。
- 3) 昼食として、かまどで炊いたご飯を、別に用意した味噌汁等と一緒に食べる。
- 4) 奈良町の展示施設、商店、飲食店等を訪ね、それぞれで設置されている井戸やかまどを観察する。許可の得られた箇所では、手押しポンプ式井戸の取っ手を押して水を汲み出す。
- 5) 感想等を発表し合う。

以上のうち、1)2)3)および5)は、センターの活動拠点である奈良町物語館で行った。また、4)は、奈良町物語館から子どもが徒歩で5~10分以内で到達できる範囲の奈良町で観察対象を設定した。

2. 3. 実践に活用した道具、材料・燃料、地域資源

2. 2. で下線を付した道具、材料・燃料、地域資源それぞれの詳細を項目ごとに示すと次のとおりである。これらの内容は、子どもには難解な部分もあったと思われるが、岩本が参加者に説明したものである。

2. 3. 1. 道具

○井戸：実践で使用したのは、奈良町物語館の敷地内に設置されている井戸である。ロープで結ばれた木製の釣瓶を井戸の水面まで落とし、滑車を介してロープを引き上げると水を汲み出すことができる。釣瓶や滑車等井戸の道具類は、2005（平成17）年、センターがサントリー文化財団等からの助成金を利用して取り組んだプロジェクトの一環として整備したものである（葛城2011）。釣瓶の製作者は、奈良町在住の木工職人である。岩本の計測では、地表から井戸の水面までの深さは約8.5メートル、汲み出した水の温度は、年間を通して16~17℃である。汲み上げた水は、煮沸すれば飲用できるため、ご飯を炊くことに利用できる。

○かまど：センターが所有するこのかまども、2005（平成17）年、センターがサントリー文化財団等からの助成金を利用して取り組んだプロジェクトの一環として、宇陀市の左官職人M氏が製作したものである（葛城2011）。重さ約70キロで、使用するときは戸外に運び出す。

○手押し式ポンプ式井戸：K商店のすぐ脇で保存されている井戸である。取っ手を押せば水を汲み出すことができる。汲み上げた水は飲用に適さない、と表示されている。

2. 3. 2. 材料・燃料

○米と釜：米は当日10カップ（1カップ180CC）を使用し、スタッフが水道水で洗い、井戸水11カップとともにアルミ製の羽釜に入れた。その後、2)まで約40分浸漬した。

○ナタネ殻：搾油用ナタネを収穫し、種を採取した後に残った乾燥した茎の部分ここではナタネ殻と呼んでいる。乾燥したナタネ殻は燃えやすいためかまどの焚き付け用燃料に適している。催しで使用したナタネ殻は、奈良教育大学自然環境教育センター奈良実習園で岩本が学生とともに栽培した搾油用ナタネを収穫した後に種を採取した残りである（岩本2012）。搾油用ナタネは、1960年代まで奈良盆地でも盛んに栽培されていた（堀井1961）もので、当時の農家では残ったナタネ殻をかまどでの焚き付けに用いたといわれる。

○スギの枯れ枝：奈良町物語館から徒歩5分ほどで到達できる小塔院の境内に500平方メートルほどの緑地があり、スギが植えられている。この催しでは、地面に落ちたスギの枯れ枝を採取し、使用した。催し当日は、4)で小塔院にも参加者を案内し、スギの枯れ枝を採取する活動に取り組んでもらった。スギの枯れ枝は、枝についたスギの葉が燃えやすいため、かまどの焚き付け用燃料にも適している。

○薪：奈良市内のいわゆるホームセンターで購入したものを使用した。ただし、商品の薪はかまどの内部スペースに収めるには長すぎるため、スタッフが事前に半分の長さに切ったものを使用した。なお、薪のほかに、使用済み割り箸も焚き付け時に使用した。

○味噌汁：協力スタッフが事前に野菜や味噌等の材料を購入し、当日、奈良町物語館に設置されている台所で作ったものである。

2. 3. 3. 地域資源

○展示施設：この催しでは、「ならまち格子の家」を訪ねた。同施設は、1992（平成4）年に奈良市が典型的町家の例として再現した新築の施設で、現在無料で公開展示している。ここでは土間にかまども再現されている。かまどの脇に置かれたアルミ製の火消し壺は、実際に使用されていたものを保存展示している。ただし、このかまどや火消し壺は展示されているだけで、使われることはない。「にぎわいの家」も訪ねた。同施設は、大正時代に建てられた町家を奈良市が買い取り、改修して創建当

初の形に復元したものである。2015（平成 27）年に改修を終え、無料で公開展示している。土間の台所には、タイルが貼られた近代的な体裁のかまども復元されているが、「ならまち格子の家」のかまどと異なり、煙突や空気孔が付けられている。「にぎわいの家」の中庭には井戸も残されているが、地表から水面までの距離は3メートルほどであり、現在水を汲み上げることはしていない。

○商店：野菜や果物等を販売しているS商店は井戸を所有しており、現在も井戸水を使用している。店主によれば、地表から水面までの深さは約11メートルである。S商店では、汲み上げた水を洗いものに利用しているという。菓子を製造・販売しているN商店は、以前に菓子製造に使用していたかまどを現在も処分せずに店内に保存している。

○飲食店：2015（平成 27）年開店のF店では、店内にかまどを設置し、客に提供するご飯をかまどで炊いている。このかまども、センターに設置されているものと同じく、宇陀市の左官職人M氏が製作したものであるが、センターのかまどと異なり、煙突が付けられている。店の裏手には、薪が積み保管されている様子を見ることができる。

2. 4. 実践の経過

この催し当日の実施経過は次のとおりである。天候は晴れ、当日の最高気温は20度を超えていた。

- 9:30 スタッフ集合後、奈良町物語館の中庭にかまどを移動するなど諸準備を行う。
- 10:00 参加者が奈良町物語館の中庭に集合完了する。参加者の子ども全員がひとりずつ井戸水を汲み出す体験をする(写真1)。汲み出した井戸水を、別の容器に移す。次に、米を子どもが交代で1カップずつ計り取って容器に計10カップ分移す作業をする。計った米はスタッフが水道水で洗い、釜に移す。続いて、井戸水を子どもが1カップずつ交代で釜に計11カップ分移す作業を行う。
- 10:20 スタッフ自己紹介・挨拶を行い、参加者もひとりずつ自己紹介をする。



写真1. 井戸水を汲み出す場面

岩本がかまどで新聞紙にマッチを使って点火する実演を行い、ナタネ殻やスギの枯れ枝を燃やして、さらに薪も加える。子どもは交代でうちわであおぐ動作を行い、火吹き竹を使って燃料に空気を送る練習をする。



写真2. 火吹き竹を使ってかまどに空気を送る場面

- 10:45 岩本が再度かまどに点火し、子どもが交代で燃料に火吹き竹で空気を送る(写真2)。
- 11:00 岩本が釜をかまどに置く。子どもは引き続き燃料に空気を送る。
- 11:35 参加者は、かまどのふたの下から水蒸気が噴き出ている様子を観察する。
- 11:45 岩本がかまどのふたを取り、ご飯が炊きあがっている様子を参加者に見せる。岩本がかまどから釜をおろし、布巾をかぶせてご飯を蒸らす。岩本が、かまどの中に残った燃え滓を火消し壺に移し、消火を行う。和室に移動し、参加者とスタッフが手分けしてご飯や味噌汁を食器に入れるなど、昼食の準備をする。センター側から、梅干しや佃煮等も用意する。
- 12:10 参加者、スタッフ全員が昼食を摂る。
- 12:50 参加者とスタッフが手分けして昼食の後片付けをする。
- 13:00 岩本の案内で、参加者が奈良町物語館近辺の観察に出発する。S商店で、参加者は井戸の水面まで覗き込み観察する。「ならまち格子の家」では、岩本が、再現されたかまどや保存されている火消し壺を紹介する。F店の前で、参加者は外側から店の中を観察し、かまどが設置されている様子を確認する。裏手に回り、薪が積んである様子も観察する。小塔院の緑地スペースで、参加者はスギの枯れ枝を採取する。「にぎわいの家」で、参加者は復元されたかまどの様子を観察する。奥の中庭には井戸が残されて

いる様子も観察する。

K商店の脇で、経営者の許可を得て、参加者の子どもはひとりひとり水を汲み出す体験をする。N商店では、経営者の許可を得て、参加者は店内に入って保存してあるかまどを観察する。

14:10 奈良町物語館に戻り、参加者はアンケート調査票に記入した後、一人ひとり感想等を発表する。

14:40 解散

なお、13:00～14:10 に実施した奈良町での観察では、井戸やかまどに関するもののほかに、元興寺塔跡、藤岡家住宅等についても、岩本が紹介した。

3. 実践の中での子どもの活動内容と感じ方

3. 1. 井戸に関する活動

前章で述べたことから、子どもは井戸に関して、次のような活動を体験していることになろう。

○井戸水を汲み上げる

奈良町物語館では、子ども一人ひとりがロープを引っ張って釣瓶を引き上げ、井戸水を汲み上げる体験をした。また、釣瓶の中の水を別の容器に移す活動も行った。その後、容器の中の水1カップ分を釜に移す活動もしている。この井戸水はご飯を炊くことに使われたので、結果として子どもは自ら汲み上げた井戸水で調理をするという体験をしたことになろう。水道の水やペットボトルの水ではなく、自然の中から水を汲み上げて使うという日常生活ではできない体験をしたともいえよう。

K商店脇では、手押しポンプの取っ手を上下に操作して水を汲み上げる活動を体験している。しかし、この水は使うことがなかったので、奈良町物語館で水を汲み上げたこととは質的に異なる。しかも、この井戸の形態では水面を見ることはできない。しかし、子どもは、奈良町物語館の井戸とは汲み上げるしくみが異なる井戸があることを体験的に理解することになったであろう。

○井戸の中を見る

子どもは、奈良町での観察においては、2 か所で井戸の中を見ることができた。S商店では、現在も使われている井戸の中を覗き見る体験をした。地表から水面までの距離約 11 メートルは、小学校低学年の子どもの体格と比べるとかなりの深さであったと推察される。子どもは、「にぎわいの家」の中庭でも井戸の中を覗いたが、こちらはS商店と比較すると、水面までの距離が浅いうえに現在は使われていないため、同じ井戸でもかなりの違いがあることを理解することになったであろう。

3. 2. かまどに関する活動

○かまどでご飯を炊くことに伴う諸活動

かまどでご飯を炊く際、点火から焚き付けまでは岩本が行ったので、子どもが自らの体を動かした活動はうわや火吹き竹でかまどの中に空気を送ることであった。

○燃焼やご飯が炊き上がることに伴う諸現象への遭遇

新聞紙、ナタネ殻、スギの枯れ枝、薪等を燃やす過程では、炎や煙が発生する。また、炎に近づくと熱気を感じる。これらの燃料をかまどで燃やす過程で子どもは炎や煙に直接接する体験をしたことになろう。現在の都市生活者の多くは日常生活の中で大量の炎や煙に接することがないと想定されるため、子どもにとってこれらに接する体験、すなわち、炎を熱く感じることや煙が目にしみるといった体験はきわめて重要なものであると考えられる。

ご飯が炊き上がる過程では水蒸気（湯気）が発生するが、子どもは釜からこの水蒸気が噴き出す過程を間近に目にする体験や、この水蒸気の匂いを嗅ぐ体験をしている。

○多様な形態のかまどを見る

子どもは、奈良町の観察においては、奈良町物語館で見たものとは形態が異なるかまどを 4 か所で見ている。「ならまち格子の家」と「にぎわいの家」では、室内の土間で固定されており、しかも、複数の火口を持つかまどを間近に見る体験をした。また、F店では、かまどが実際に使われている様子も見ている。さらに、N商店で見たかまどは、ご飯を炊くのではなく、菓子の製造に用いられたという説明に接する。このように、奈良町における観察で子どもは、さまざまな形態のかまどを見る体験を得たといえよう。

○燃料用のスギの枯れ枝を採取する

子どもは、奈良町の一角にある小塔院の緑地スペースで、スギの枯れ枝を採取した。都市生活者は、日常生活の中で燃料用に木の枝を採取する活動をする機会はほとんどないと想定されるため、技術的にはきわめて簡単な活動であるが、参加した子どもにとって貴重な機会となったであろう。

3. 3. さまざまな体験に関する子どもの感じ方

これまで述べた活動に関して、参加した子どもはどのようなことを感じ取ったのであろうか。催し終了後に実施したアンケート調査結果を通して、この点を明らかにする。アンケート調査票では、参加者の属性を尋ねた後に、次の2つの質問を設けた。

ア. 今回の催しで体験したことで最も良かったことに◎を、良かったことに○を付けてください。

(選択肢：井戸水汲み、ご飯を炊く準備、かまどでご飯を炊く、その他)

イ. 奈良町探検でとくに興味を持ったことは何でしたか。

(自由記述)

ア. は、保護者と子どもそれぞれに回答を記入するよう求めた。ただし、小学校低学年の子どもにとってはアンケート調査への回答を自力で行うことが困難であると想定し、保護者の補助を得てよいことを示唆した。

設問ア.の結果を見ると、「最も良かったこと」として

子ども7名のうち5名が「井戸水汲み」を選択し、2名が「かまどでご飯を炊く」を選択した。いっぽう、保護者は7名中6名が「かまどでご飯を炊く」を選択し、対照的な結果となった。

「最も良かったこと」として過半数の子どもが「井戸水汲み」を選択したのは、子どもが奈良町物語館で釣瓶を引き上げて井戸水を汲み出した体験をしたことに加えて、K商店脇では手押しポンプの取っ手を上下に操作して水を汲み上げる活動を体験したことが影響したものと考えられる。いっぽう、保護者とくに母親は、「ご飯を炊く」仕事は日課になっていると考えられ、現代の家庭生活では電気炊飯器を使用している家庭が多いであろうから、薪などの燃料を使ってかまどでご飯を炊くことを新鮮に感じ、関心を向けたのではないかと推察される。

2015（平成27）年12月23日・26日に実施した催し後のアンケート調査結果では、子どもが「最も良かったこと」として選択したのは「かまどでご飯を炊く」活動であり、今回の回答傾向とは異なる結果であった。今回の催しと比較して12月実施時の子どもの回答傾向が異なったのは、2015年の催しでは、K商店脇で手押しポンプを見ただけであり子どもが操作する機会を設けなかったことが影響したと考えられる。また、今回の催しを実施した10月15日の気温は20度を超え、子どもは井戸水を「気持ち良く」感じたであろうが、12月の催し実施日は両日ともに最高気温が10度程度であり、井戸水を触っても「気持ち良く」感じることはなかったことが影響したとも考えられる。いっぽう、12月では、かまどで火を焚くときの温かさを肌で感じることはあったと考えられる。井戸やかまどを使用した催しは、その日の気温との関連で子どもの感じ方が異なるものになる可能性があると考えられるのである。

2番目の設問「奈良町探検でとくに関心を持ったことは何でしたか。」では、子どもと保護者合計11件の記述があったうちで、井戸とかまどに関するものが8件あった。以下にその8件を列挙する。

- a. 井戸水をくんだこと（小1）
- b. ポンプで水を汲むこと（小1）
- c. 手押しポンプ（小1）
- d. 井戸の水くみ（小1）
- e. 八百屋さんに現在も使用されている井戸があり、おどろきました（保護者）
- f. 井戸の中を見たこと（小2）
- g. かまどのある生活を拝見できたこと（保護者）
- h. 「かまどや井戸を見に行く」というのが初めてで興味深かった（保護者）

a.b.c.d.は、K商店脇でK商店脇では手押しポンプの取っ手を上下に操作して水を汲み上げる活動を体験したことであると考えられる。小学校低学年の子どもが自力で操作し水を汲み出すことができたことが強く印象に残ったものと考えられる。

4. 催しにおける子どもの学びの意義

4. 1. 原体験としての意義

今回の「奈良町井戸とかまどご飯体験」は、子どもの学びとしての原体験を得る機会になり、とくに火と水に関する原体験がふんだんにあったと考えられる。

原体験とは、小林・山田（1993）によれば、五感（官）を伴った自然と触れ合う体験のことである。原体験は、長く記憶にとどまり、幼い頃の体験ほどその印象は強いことから、就学前から低学年の頃に体験させることが望ましい、ともいう。さらには、原体験を火、石、土、水、木、草、動物の7類型に分け、それぞれの具体例として、火の場合は「物が燃えるにおいをかぐ」、「燃える音を聞く」、「火の粉を見る」といった体験を挙げている。

今回の催しにおける水に関する原体験としては、井戸水を汲み出すことや汲み出した井戸水に直接接触することが原体験に相当すると考えられる。現代の家庭生活では、水を得るためにすることは水道の蛇口をひねることやレバーを上げ下げすることが普通であろうが、水道の水を得ることはいわば人の手で加工された水を得ることであり、原体験とはいえない。井戸水を汲み出すことは、天然の水を得ることであり、原体験に当たるといえよう。

火に関する原体験としては、小林・山田（1993）が例に挙げた「物が燃えるにおいをかぐ」、「燃える音を聞く」、「火の粉を見る」は、今回の催しで確実に体験したと考えられる。そのほかに、火吹き竹で空気を送ることによって火の勢が増すことに気付くことや、燃料が燃える過程で発生する煙に接することなど、かまどで燃料を燃やす過程では、子どもは火に関する原体験をいくつも得たと考えられる。現代は、調理や暖房等に用いる火力をすべて電力に依存する家庭も少なくないと想定され、家庭生活上で炎や煙に接する経験を持たない子どももいるであろう。こうした中で、今回の催しにおけるかまどでご飯を炊く体験は、火に関する原体験としての意義が十分にあったと考えられるのである。

4. 2. 昔の暮らしを学ぶ意義

今回の催しにおいて、子どもは昔の暮らしの一端を体験的に学ぶ意義があったと考えられる。

昔の暮らしは、小学校3・4学年社会科で取り上げられる内容である。今回の催しで子どもが体験したことは、平成20年3月改訂小学校学習指導要領・社会3・4学年の内容(5)アに見られる文言「古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子」に直接関わると考えられる。

井戸水を汲み出して飲料水や生活用水に用いることは、昔の暮らしでは、都市部であってもごく普通に見られたことであろう。また、燃料を燃やしてかまどでご飯を炊くなど調理をすることも、同様であろう。こうしたこと

から、今回の催しの中で子どもたちが体験したことは、小学校社会科 3・4 学年の学習内容の一部を体験的に学ぶ意義があったと考えられる。井戸やかまどは都市部の一般的な小学校では備えられていないであろうから、今回の催しは、学校教育の内容を補完する意義もあったことになる。

子どもが昔の暮らしを学ぶことには、さらに二つの意義があると考えられる。一つは、社会科歴史学習の導入としての意義である。昔の暮らしについて学ぶことは、現在から過去に遡って思考をめぐらすことでもあることから、子どもにとっては歴史的概念の基礎を身に付ける機会になるといえよう。もうひとつの意義は、昔の暮らしの一端が災害時に一時的に復活する可能性があるため、実際の様子を体験的に知っておくことが緊急時対応上有用な点である。災害時にいわゆるライフラインが寸断されれば、水道、電力、ガスが使えなくなることがある。そのときに、木材を燃料としてご飯を炊くことがあり、予めその体験を持つておくことは緊急時に役に立つことがあると考えられる。井戸についても同様である。

5. まとめと今後の課題

本報告では、2016（平成 28）年 10 月に、民間非営利団体が主催し、奈良町で井戸とかまどを活用しご飯を炊く活動等を子どもが体験するプログラムを企画し実践した目的、内容、経過、意義を具体的に述べた。子どもは、井戸水を汲み出す過程に関心を強く抱いたが、同伴の保護者は、かまどでご飯を炊く過程に強い関心を抱く傾向が見られた。しかし、2015（平成 27）12 月に実施した際の子どもの関心傾向は、10 月に実施した際と異なった。ほぼ同内容の実践であっても、諸条件が異なると、子どもの受け止め方も異なったものになる可能性があることが示唆された。

今回の催しでは参加者を一般公募したが、センターとしては、学校関係団体等を参加者として受け入れることも考えてよい。奈良町物語館では、20 名程度以内であれば学校等の子どもの団体を受け入れ、井戸とかまどを活用した実践をすることは可能だからである。また、奈良町物語館で学校教員が担任する子どもを対象に実践することも検討されてよい。今後は、本報告で示したような催しを毎年実施し、さらに検証を重ねていくとともに、他の形態による実践も進めていくことが課題である。

注

- 1) 公益社団法人奈良まちづくりセンターは、母体となった奈良地域社会研究会が 1979（昭和 54）年に結成され、その後 1984（昭和 59）年に一般社団法人奈良まちづくりセンターとして発足した民間団体である。2014（平成 26）年に公益社団法人に移行した。2016 年 11 月現在、会員数 103 名、理事長は二十軒起夫である。歴史的町並みの保存および地域の活性化に寄与するためのまちづくり運動の推進に活動の重点を置いている団体である。明治時代の町家を改修した建物の「奈良町物語館」（奈良市中新屋町 2-1）を活動拠点としている。岩本は、センターの副理事長 5 名のうちのひとりである。
- 2) 奈良町とは、奈良市旧市街地の元興寺付近の歴史的町並みが比較的保存されている地域を指す通称であり、特定の行政区分を指す地名ではない。奈良市が 1994（平成 6）年に指定した都市景観形成地区の中心部付近とおおよそ重なる。
- 3) この催しの参加者募集は、2016（平成 28）年 9 月下旬から開始した。奈良市教育委員会の後援名義使用許可を得たうえで作成したチラシ約 700 枚を奈良町付近の奈良市立小学校等で配布したほか、センターホームページおよび Facebook 等を通して募集を行った。催し当日は、参加した子どもからひとりあたり 200 円、保護者からは 400 円をそれぞれ徴収し、材料費や燃料費等に充当した。

参考文献

- 岩本廣美, (2012), 「奈良教育大学における菜の花プロジェクトの取り組み」, 高澤正雄『豊かな心を育む 50 の話』, 幻冬舎ルネッサンス, pp.164-171.
- 岩本廣美・細谷恵子, (2005), 「駄菓子屋の教育的機能ー子どもと店員との関わりを通してー」, 教育実践総合センター研究紀要(奈良教育大学), 14, pp.65-74.
- 葛城桂子, (2011), 「音の庭づくり」, 地域創造(社団法人奈良まちづくりセンター), 49 増刊, pp.97-106.
- 小林辰至・山田卓三, (1993), 「環境教育の基盤としての原体験」, 環境教育, 3(1), pp.28-33.
- 堀井甚一郎編著, (1961), 最新奈良県地誌, 大和史蹟研究会, p.469.